

2 オムニバス「光と闇」
(Lux aurumque (Eric Whitacre))
(Nox aurumque (Eric Whitacre))

Lux aurumque(Eric Whitacre)

曲について

この曲の詩について注目し、簡単に説明する。

Lux,	Light,
calida gravisque	warm and heavy
pura velut aurum	as pure gold,
et canunt angeli	and the angels sing softly
molliter modo natum.	to the newborn babe.

意外に思う方が多いような気はするが、この詩はラテン語テキストが先にできたのではない。もともと Edward Esch という 1970 年生まれの詩人がこのテキストを英語で書き、それをウィテカーが曲にするために Silvestri 氏がわざわざラテン語に直したということだ。（ラテン語に直すとある種の匿名性を感じてしまうのは僕だけだろうか。そういう意図があったかどうかはわからないが）

Silvestri 氏はこう述べている。

“The original poem into Latin as singably and as sonically beautifully as I could”.
ラテン語は今なお生きた言語であり、クラシックな時代が終焉しても、使われてしかるべきだというのが彼の考え方であり、そのスタンスは独特であるといえよう。

譜面について

新宿文化会館は最初におきたいのだが、とても響くホールというわけではない。むしろかなり吸収されるという噂を聞いていることを最初に了承して

もらいたい。その上でこの曲を音響的に活路を見出すためには、諸所の工夫が必要だと思われる。

この曲で大枠として大変なのは次の点である。

きちんとぶつかった音でのロングトーン。

記号に象徴されるフレーズの膨らみ縮みの支え。

語尾の処理

ぶつかった音でのロングトーンは言わずもがな背筋による呼吸の持続力が試される。またフレーズ処理は語尾とも絡むが、基本に忠実にそして自然にできるように時間や回数をかけて修正していくべきだと考えられる。

またホールのことも考えると、かなり薄く、統一感のある演奏が要求されるのではないだろうか。

Nox aurumque (Eric Whitacre)

曲について

Latin text

O ARMA!

O LAMINA AURATA!

GESTU GRAVES NIMIUM,

GRAVES NIMIUM VOLATU.

AURUM,

INFUSCATUM ET TORPIDUM

SUSCITA!

DILABERE EX ARMIS IN ALAM!

VOLEMUS ITERUM,

ALTE SUPRA MURUM;

ANGELI RENASCENTES ET EXULTANTES AD ALAS

AURORARUM,

AURORUM,

SOMNORUM.

AURUM,
CANENS ALARUM,
CANENS UMBRARUM.

English text

Gold,
Tarnished and dark,Singing of night,Singing of death,Singing itself to sleep.
And an angel dreams of sunrise,And war.
Tears of the ages.O shield!O gilded blade!You are too heavy to carry,Too heavy for flight.
Gold,Tarnished and weary,Awaken!Melt from weapon to wing!Let us soar again,High above this wall;
Angels reborn and rejoicing with wings madeOf dawn,Of gold,Of dream.
Gold,Singing of wings,Singing of shadows.

このラテン語テキストは Silvestri 氏自身の作品になっている。そもそも Whitacre はこの Silvestri 氏の作品を扱うことが多く、7つの作品に曲をつけている。(Sleep 等) この作品の作成にあたって氏は、次のように述べている。
私が合唱作品に詩を提供するときに共通して大切にしていることは、まず一つにその詩が作曲者の要望に沿うべきものであること。それだけではなく、その詩自身がそのまま成立しているものであること。の二点であると明言している。その上で whitacre に詩を提供するとき、氏は whitacre の言葉のイメージへの執着、こだわり、そしてその表現、またはやはり宗教音楽のフレームを意識したラテン語テキストの利用について気を使っていると述べている。

ちなみに上記の2曲はもともとセットにされており、作曲者自身も対称性に意図があったものと思われる。二つの異なるエネルギーの昇華の仕方に注目させるような演奏を構築していきたい。

譜面について

この曲はかなり体力的にハードなことを強いられる。何しろ音がまず高いことに目がいくだろう。ソプラノには体力が必要だが、テノール高声部には今年大いに欠如している裏声の能力が必須となってくる。絶対に裏に返すつもりで書いてあるような部分がたくさんあるため、研究を重ねることが必要になる。

この曲は MS の観点からいくとやや重ためであるが、この組みのオムニバスならちょうどいい緊張感のもと練習が重ねられると思ったため提出している。全体的には、それこそクラスターの差音が聞こえるような地味なトレーニングをひたすら積んでから一步一步前に進んでいける練習をしていきたい。外国曲選曲については迷った部分も多かったが、このようなエネルギッシュな曲は今年の柏葉にはあっていると考える。